トリックスターの旅——日本（熊本）・中国・インド・ドイツ——

難波 美和子（比較文学）

1.「昔話」の拡がり

現在、「昔話」あるいは「民話」と呼ばれる口伝えのお話は、語り手と聞き手とが互いに参加する「場」（囲炉裏端の寛ぎ、手仕事の合間など）で家族や共同体の中で、人から人へ、たいていは年長者から年少者へと、長い間受け継がれて来たものであった。それらは先祖から子孫へ伝えられる言葉の財産であり、語りのリズムや話の構成にその共同体の性格が刻み込まれていると考えられてきた。同時に昔話は、いわゆる「公式の」歴史に記録されることのまれな無名の人々同士の交流のしるしでもある。高価なものや必要なものが欲しいと思う欲求によって遠い地域の人々が直接間接に行き来するように、面白い話を聞きたいとか、話して人を楽しませたいという欲求がもともと人間にはあるのではないだろうか。面白い話、目新しい話は人々の舌に乗って、土地から土地へと運ばれていったのだろう。時にはより面白くするために新しい要素が加わったり、ある時には、語り手にとって不自然な要素が除かれたりして、元の話に近づいたり、少しずつ変化したりしながら多様な文化の間に広まっていく話もあった。そしてそれぞれの社会独特の要素を加えて、人々の間に根付いていった。

だからわれわれは、「昔話」が先祖からの大事な文化遺産なのだと気づいて以来、いかにも独特な文化を背景に持つお話を見出す一方で、それ以上にしばしば、自分たちにとって親しいお話が、とても遠い地域の、文化的にも非常に異なっていると思える社会で、確かにその社会の性格を示しながら、そっくりに語られることに気づいて驚かされてきた。そのようなお話の存在は、人々の心を惹きつけるものが多くの文化で共通しているということを示すとともに、それを運んだ人から人へのつながりが存在したことを想像させる。言葉が異なる人々の間で、お話が伝えられる場面を想

像してみることも、とても面白いことではないだろうか。

たとえば、「古屋の漏り」というお話の広がりを考えてみよう。

> 昔、貧乏なおじいさんとおばあさんが、雨の日に、盗人や虎、狼より「もる」が怖い、今日は「もる」が来そうだ。と話しているのを、軒下に潜んでいた虎（または狼）と梁の上の泥棒が聞く。自分より恐ろしい「もる」が来ると逃げ出すと、あわてた泥棒は虎の上に落ち、「もる」の上に落ちたと思う。虎は上から「もる」が落ちてきたと必死で逃げる。虎が走る間に泥棒は自分が虎に乗っていると気づいてびっくりし、転げ落ちた拍子に穴に落ちる。虎は「もる」から逃れられてほっとするが、動物たちに笑われて戻ってくる。穴に猿がしっぽをおろすと泥棒は必死でそれにしがみつき、猿は「もる」が食いついた、と叫んでみんな逃げ出す。

熊本各地域の伝承の中でもよく知られたお話だが、東北地方から九州地方まで、日本の各地に伝承がある。そして同じ話が朝鮮半島でも、中国大陸の諸地域でも語られていた。更に遠く、インドからもそっくりなお話が採集されている[1]。「古屋の漏り」は時間的には、インドで紀元４～５世紀に成立したとされる『パンチャタントラ』という説話集にまでさかのぼれることが知られている。そこで、おそらくは仏教的な説話の中に取り込まれて、経典とともに翻訳され、説教の場などを経て人々の間に広まっていったのだろうと考えられている。日本へは中央アジアから中国・朝鮮半島を経て、もしくは東南アジアを巡ってたどり着いたことになる。しかし説教の場を離れ、雨漏りが怖いという意外さと貧しい人々にとっては切実な実情、また動物や泥棒による勘違いの面白さが、語り手と聞き手に共有されて広まったのだろう。語りの場で恐怖から起こる勘違いの連鎖に関心が移れば、虎や狼、他の野生の獣たちの混乱振りが語りの中心になるだろうし、虎や狼に乗ってしまった人間の恐怖感がどうやってこの事態から逃れたかということが中心の物語になることもある。だがどこが語りの要点になったとしてもそれが「古屋の漏り」の変奏であるということは、各地のそれぞれの話を構成するモチーフを比較してみるとよくわかる。そのような要

素や展開の仕方によって「同じ話」あるいは「少し変化した話」と認識される話をある「話型」の「類話」であるという。また非常に異なった話だが、構造の骨子を比較すると同じ話の要素が交替したり、消失したりしたことが理解できる場合もある。

「古屋の漏り」は伝承の出発地と伝播の過程がおおよそ想定されているが、文献として残っているもの以外には、事実関係を確認することはできず、伝播に携わった人々の間の関係性は想像するほかない。昔話の比較研究は、伝承された話の構成や要素、登場する小道具などを分析検討することによって、一つには、それを語った人々の心情や世界観を理解しようとする試みである。また、話の伝承地の広がり方によってそれがどのように広まったのかを考察することでもある[2]。従って類話の分布を調べることはただ伝播のルートを知ることになるだけではなく、お話が通った各地の文化や歴史、経済や政治の動きをも研究することでもある。

2．狡猾な主人公

ここでは、昔話の広がりと類似性を理解するために、日本では「俵薬師」と呼ばれる話型を例として取り上げる。熊本県内では阿蘇地域から数例の報告が見られ、日本全国に伝承がある、印象的な話である。概要は次のようなものである。

> 「悪いことをする主人公が主人や周囲の人々を怒らせ、罰として俵に入れられて海に投げ込まれて殺されることになる。俵の運び手が離れた隙に、偶然通りかかった眼病を患う人に、俵に入ると目が治ると説いて入れ替わり、無事に戻って驚かせる。そして海の中が素晴らしかった、いくらでも魚が捕れるなどと言って主人を海に入らせ死なせる。そして主人の財産を自分のものにする。」

この話を展開に従ってモチーフに分割し、類似と差異を明示する比較方法を示す。新潟で報告された類話、中国、インド、ドイツの類話を検討するが、これは知られている類話のごく一部である。

1「俵薬師」（阿蘇郡白水村両併・女）[3]

Ⅰ　〔主人公の説明〕嘘ばかりつく作男がいる。

Ⅱ　〔主人公の悪い行為①〕男は仕事を怠ける。

Ⅲ　〔主人公の悪い行為②〕奥さんが病気だと嘘をついて旦那を怒らせる。

Ⅳ　〔主人公が処罰を狡知によって逃れる〕旦那は男を箱に入れ、海に投げ込ませることにするが、運び手がその場を離れた隙に通りかかった座頭（盲人）に箱の中は竜宮だと言って入れ替わる。箱は海に投げ込まれる。

Ⅴ　〔主人公が報復する〕男が戻ってくる。旦那に竜宮行きを勧め、旦那は箱に入って海に投げ込まれる。

Ⅵ　〔結末〕教訓：人の言うことをそのまま信じず、自分で考えよ。

これを他の７つの類話を比較する。それぞれの題名と伝承地は次の通りである。

2　「金をひる馬」（小国町・男）[4]

3　「俵ん中じ目の治療」（阿蘇町・男）[5]

4　「うそこきサン」（新潟県・男）[6]

5　「エンマ様をぶち殺した農夫」（中国　湖北省）[7]

6　「貧いアガリア」（インド　マハーコーシャル州）[8]

7　「　尺男と伯父」（インド　サンタル族）[9]

8　「小百姓」（ドイツ　グリム61）[10]

9　「かぶら」（ドイツ　グリム146）[11]

それぞれを１「俵薬師」のモチーフと比較対照したものが表である。すべてが埋まっているわけではないし、それぞれが全く同じではないが共通するモチーフが展開していることがわかる。

モチーフⅠで紹介される主人公はいずれも貧しいか、取るに足らない者とされている。６の主人公は異常な腕力を持っているが、やはり貧しい少年である。昔話では、主人公の貧しさや孤立は、話を始めるきっかけとなっていることが多く、共通点としては特徴とはいえないが、このことが主人

公の「知恵」や最終的な「成功」の意味を強める。

モチーフⅡとⅢは主人公の悪い行為の列挙である。１では「怠けること」と「嘘をつくこと」が対になっているが、主人もしくは有力な人々をだます行為は決定的な一つでもよいし、いくつも連鎖する可能性もある。２と５ではふつうの物を宝物と偽って対立する親族に売りつけるという点で共通し、７と８では自分の牛を殺し、その皮を売った金で豊かになったといって周囲の人々をだますという行為が共通している。偶然手に入れた財宝を、殺された動物の皮を売った代価だといって相手に自身の財産を破壊させるというモチーフは「馬の皮占い」などの他の狡猾譚の中でも用いられ、熊本県内でも「馬鹿太郎」という話の中で語られている。「金をひる馬」を売りつけるモチーフはそれだけでとんち者を主人公とした笑話として語られることもある。７だけは、だまされた伯父たちが主人公に与える罰が彼を殺そうとすることではなく、家に火をつけることであり、モチーフ３で終わっている。語り手は、十分に主人公の狡知が語られ、伯父たちが処罰されたと見なし、Ⅳ以降は語られる必要がなくなったと考えられる。

モチーフⅣ〔主人公が処罰を狡知によって逃れる〕がこの話型の中心モティーフである。日本では多くの話で、このとき主人公が俵に入れられ、それを「薬師様の目の治療」と偽ることから「俵薬師」という話型名が与えられている。身代わりになる人物はしたがって日本では目に病気を持っているか、目が見えない人である。ここで挙げた中国の例も目の治療であるので、この要素がどのような広がりを持っているのかを精査しなければ、日本独自の語りと断言することはできないだろう。６の身代わりは「神に会いたい」ために袋に入り、８の場合は村長になりたいという願望が主人公に利用されることになる[17]。９では主人公は、身代わりの学生を助けてやっている。しかし他の話ではいずれも身代わりにされた人物は自分のささいな願望や欲のために殺されてしまう。いったん殺されたという確認が次のモチーフでの主人や敵対する有力者への報復の複線になるので、この犠牲者の死がない場合には９のように話はここで終わる。

Ⅴで主人公があの世、または水中から魚や家畜をつれて戻ってくると、敵対者たちは自ら水中へ飛び込んでいく。３では村人たちは驚いただけだ

が、ほかの話では敵対者たちはよけいな欲を出したために死ぬ。語り手と聞き手との間の、あの世から戻ってくるはずがない、という共通の了解と、語りの中の人物たちが主人公の言葉に簡単にだまされる可笑しさが、残酷な要素を含むこの話を、ほとんど笑話に近いものにしている。

結末として付加されていることは、4と8では主人公が敵対者たちの財産を我が物にする。2や5でも同様のことが想像される。貧しかった主人公は財産を手に入れ、成功者となる。6では敵対者たちが主人公によって生き返らせられる一方で、身代わりだった牛飼いだけが忘れられている。5では、話はさらに続いて死後の世界に移動し、主人公はエンマ王と対決、ついにエンマ王に成り上がる。エンマと衣装を交換してエンマ王に成り代わる話はそれだけで独立した笑話としても語られる[13]。このように、結末に次々にモチーフが付加されていってさらに長い話に展開していく場合もある。

ヨーロッパでは十世紀の文献に見られるというこの話が、どのような旅を辿ったのかを断定することは不可能だが、様々な時代、様々な場所でこの狡猾な男が死の危険を脱し、敵対者たちをさらにだまし、最終的な勝利者となる話が語られ続けたことは確かだ。聞き手たちは主人公のいたずらやずるがしこい手腕を楽しんだり腹を立てたりしたのはどのような場だったのか。実に様々な言葉で、俵や樽や箱や袋の中の人物が語られたはずだ。

3．トリックスターの効用

ふつう「昔話」では、主人公は正直で親切といった性格の持ち主であり、そのような主人公が幸福を得ると思われている。ところが、上で検討した「俵薬師」のように正反対の性格の主人公も、決して珍しくはないのである。熊本の昔話を見ても、「悪人」とまでは言わなくとも、いわゆる「とんち話」の主人公たちは、決して正直者とはいえないだろう。かれらはむしろずるさをも含んだ「賢さ」で富を奪い取ったり、危機を切り抜けたりする。彦一に代表されるような「いたずら者」や住職と小僧の話は短い話が多く、また笑話と位置づけられているが、弱者が強者をやりこめることによる笑いであって、それは主人公の「正直さ」のためではなく「狡知」

による。「狡知」に長けた主人公の活躍は、語り手と聞き手をわくわくさせる。危機をどのように切り抜けるかは、語り手の話術の聞かせ所である。それは聞き手に困難を切り開くための「知恵」の所在を教えることでもあり、弱者が強者に勝つことは庶民にとっては息抜きともなっただろう。ただし、騙されるのは、常に強者とは限らない。「俵薬師」のように、しばしばさらなる弱者、主人公以上に周縁的な人物が犠牲者となる。このようなお話は「狡知」による弱者の勝利という面白さとともに、「富」の由来の両面性を反映している。善良な主人公が善意の行為によって富を得るお話が、「富裕」というものを人為以上の「天意」によって与えられる善なるものと捉えているのに対し、主人公が狡猾な行為によって富を得るお話は、それが道徳的に否定的なものでありうることも示す。

ともあれ、このような「いたずら好き」で「狡猾」な性格の人物像は、多くの文化に見られ、ときには神話や伝説の中で非常に重要な役割を果たすことが知られている[1]。このような人物を「トリックスター」と言うが、これはきわめてずるがしこく、人を陥れたり、だましたり、時には人を破滅に導く存在である。彼らは秩序を破壊し、それによって新しいものを生み出す。時には世界が干ばつや洪水の発生、人間の避けられない死のような決定的な欠陥をもっているのは、トリックスターの失敗のせいである。こうした主人公が活躍するお話は、だましや悪戯の内容は異なっているものの、構造的には互いに似通っている。

正直で善良である主人公は、社会を統合していく価値観を表して称揚される。一方で嘘つきで騒々しく悪辣な主人公は、日常の社会がはらむ矛盾を暴き出し、笑いに解消させる。あるいは共同体の代表者として生け贄ともなる。狡猾さを楽しむために、実際に人をだます必要はないのだから、批評家としてこのような「いたずら者」は決して物語の中からいなくならないだろうし、自由自在にだまし、楽しませ続ける。

1　現代に採話されたものには「ティプティパニ」（辛島昇・西岡直樹　編訳『インドの昔話』（下）、春秋社、pp.107-117）がある。これはベンガル地方の昔話である。「ティプ、ティプ、という雨漏りの擬声音を擬人的に「ティプティパニが来るよ、と言ったことを虎と牛泥棒が

説解する。

2　伝播によるのではなく、人類共通の発想によってまったく独自に異なった人々に語られる話もあるだろう。

3　ここでは『日本昔話通観　第24巻　長崎・熊本・宮崎』(pp.332-333)に梗概が挙げられている「依薬師」を基準話型として扱う。括弧内は語り手の居住地・性別である。

4　阿蘇郷土の会編『小島頼男さんの阿蘇ん民話　後編』1979年より

5　長谷部保氏『阿蘇のむかし話』青潮社、1975年より

6　笠原政雄　語り、中村とも子　編『雪の夜に語りつぐ　ある語りじさの昔話と人生』福音館書店、1986年より

7　飯倉照平　編訳『中国民話集』岩波書店（岩波文庫）、1993年より

8　The Clever Agaria, from V. Elwin, Folk-Tales of Mahakoshal, 1944 (reprinted in 1980)

9　Spanling and his Uncles, from C.H. Bompas, Folklore of the Santal Pargnas, 1909 (reprinted in 1977)

10　高橋健二　訳『完訳　グリム童話集２』小学館、1985年より

11　高橋健二　訳『完訳　グリム童話集４』小学館、1985年より

12　彼の梵蔵へのあこがれは、病気を治したい人をだますよりは、だまされる側に同情を抱かせにくいものにする。日本の場合、「依薬師」が目を効験があるという信仰が、依に入れられた主人公と眼病を患う檀那者という連想を生んだとも考えられる。

13　『小島頼男さんの阿蘇ん民話　後編』の「今ん閻魔大王さん」と「閻魔大王さんは庄やんじゃった」にもみられる。また衣装を交換することが身分を交換することになるというモチーフは日本では「絵姿女房」で妻を奪われた夫が殿様と着物を交換して殿様になるという形でしばしば語られる。

14　山口昌男『アフリカの神話的世界』岩波書店（岩波新書）、1971年などを参照。

「昔話」の語りの場はこのようなイメージだろうか？
（遠野市）